静岡県日中友好協議会ニュース

No. 116
2019. 10

江南地方の水郷古鎮

～悠久の息吹につつまれる～　安　昌

紹興市柯橋区（旧・紹興県）の北西部にある「安昌古鎮」は、北宋（960～1127）時代に街並みができ、1,000年以上の歴史があります。古くから「碧水が住宅千万軒を貫く、虹のように17の橋が跨ぐ」と称えられてきた、江南水郷の独特な風情が溢れる地域として知られ、何度も戦禍にみまわれましたが、明・清時代に再建され、現在に至っています。

水路沿いの石畳の道には、雨が多いこの地方特有の瓦屋根付きの木造家屋の商店街が立ち並んでいます。ここ安昌の特産は腊腸（中国式ソーセージ）、白飴、醤鴨等があり、屋台店舗の廊棚の下には、豚の腸詰めや魚の塩漬けが干されている姿が見られます。川にかかる石橋にはアーチ、梁、亭と様々な形式が見られます。その中で一番有名なのは「福禄」、「万安」、「如意」と名づけられた３つの橋があり、古鎮に住む人々にとっては、結婚する時に３つの橋全部を渡り、水上結婚式をとり行う習慣があります。また、銀行の役目を果たした「穂康銭庄」や「中国銀行旧址」等が残っています。

現在古鎮の周囲は繊維と電子部品関係の工場が集まっている工業団地になりましたが、全長1.7キロの安昌古鎮には、昔からの水辺の生活風景が今なお残っています。

〈特集１〉　静岡県・浙江省が「ピンポン外交」　卓球大会を杭州で開催

互いに真剣勝負、県勢粘り強く健闘

８月27日、外気温36℃の真夏の強い日差しの中、第４回目となる静岡県・浙江省友好交流卓球大会が浙江省杭州市の浙江樹人大学体育館で開催されました。

2014年、2015年、2017年に続き、４回目となる今大会には、静岡県側から小中高、男女各４名ずつの24名の選抜選手、浙江省側から48名の選手、合計72名が出場しました。結果は浙江省側の圧倒的な強さで、全部門で優勝しました。県勢は高校男子の部で２位、高校女子の部で２位と３位、小学生女子の部で２位と、４名の選手が入賞し、健闘しました。

大会は吉林静岡県副知事と呂林浙江省体育局副局長（1992年バルセロナオリンピック男子ダブルスで優勝）による始球式が行われ、和やかな雰囲気の中で始まりました。それまで、にこにこしながら友好を深め合っていた選手たちでしたが、ひとたび試合が始まると、真剣なまなざしで試合に臨んでいました。試合の合間、試合後は言葉の壁を乗り越え、身振り手振りやスマホの翻訳アプリで意思を伝え合い、同年代同士の友情を深め合っていました。

今や花形スポーツになった卓球種目で、両県省の青少年交流を大きく促進することができました。来年2020年は東京でオリンピックが、2022年には杭州でアジア大会が開催されますが、この大会に出場した選手の中から、水谷準選手や伊藤美誠選手等の世界でも闘っていける本県選手が輩出されることを期待して、友好交流卓球大会は大きな成果を収め、有意義な一日は幕を閉じました。

〈特集２〉　浙江省の豆記者、日本を行く

豆記者、鋭い質問しながら精力的に取材

８月５日(月) ～ ８月15日(木)の15日間、浙江衛視（テレビ局）が組織した、浙江省内の小・中学生で構成の「中国藍小記者文化交流訪日団」（浙江省豆記者団）一行40名が来日し、静岡県、広島県、愛知県、東京都、茨城県等日本各地を訪問しました。

浙江衛視（テレビ局）傘下の『少年児童チャンネル』は、毎年、浙江省内の優秀な小・中学生を海外に豆記者として派遣しています。今年は、「2019日中青少年交流推進年」にあたることから、特に友好県省関係にある静岡県を中心に訪問し、県内外の青少年と交流を図るとともに、日本国内を視察し、見聞を広めることを目的として来日しました。団員は最年少９歳、最年長15歳、皆バイオリン、ピアノ、ダンス等の特技があり、中には英語も流暢に話すことができます。

静岡県では川勝県知事・森理世元ミスユニバース・トヨタのエンジニアへのインタビューをしたり、静岡新聞・NHK静岡・東海大学海洋博物館見学、剣道・ダンス交流、富士山登山をしたりして、見聞を広めました。広島県では原爆記念式典への参加と被爆者インタビュー、愛知県ではトヨタの工場見学、茨城県ではノーベル物理賞を受賞した小林教授へのインタビュー、KEK・産総研・JAXAの見学、東京都では平山佐知子参議院議員へのインタビュー、国会参議院・日本未来科学館・東京都庁・浅草を精力的に見学し、豆記者にとってはとてもユニークな体験旅行となりました。

中国には「望子成龍」（わが子が学問や仕事で成功または出世することを願う親の気持ち）の諺があり、他の子に負けないよう、精鋭教育が行われ、反面、日本では団結・協調等社会性の教育が重視されていることが印象に残ったようです。豆記者達は、日本の青少年との交流や県内外の施設見学、皆で協力してカレーを作るなどの体験を通じて、チームワークの大切さを学んだとの感想が寄せられました。こうした次世代の青少年の交流を通じて、互いの教育や双方の良さにふれることによって、静岡県と浙江省と友情に更に寄与することが期待されます。

交　流　往　来　点　苗

両校、固く握手　三島南高と麗水学院附属高級中学

友好締結20年を越える歴史がある三島市と麗水市との間において、７月22日～26日、麗水学院附属高級中学一行、教師・生徒を含め15名（引率：丁閔方校長）が三島市を訪問し、次世代へつなぐ、両地の高校で学校交流が行われ、新たな交流の１ページを開きました。

７月22日、県立三島南高校の小川圭一校長をはじめ関係者が宿泊ホテルで一行を出迎え、歓迎の意を伝え、併せて両校長は固い握手をしながら、共にこうした機会を通じて交流が深まることを期待する旨のエールが交換されました。

一行は、滞在中に三島南高校を訪問して学校見学、ホームシティ等の体験をした他、三島市長を表敬して、和やかな雰囲気の中、両市の若い世代の交流促進などを話題に懇談しました。また、両校は学校間交流覚書と今後の交流プラン協議交流に係る覚書の締結を行い、両校の交流が一層深まることが期待されます。

調理室にて調理実習

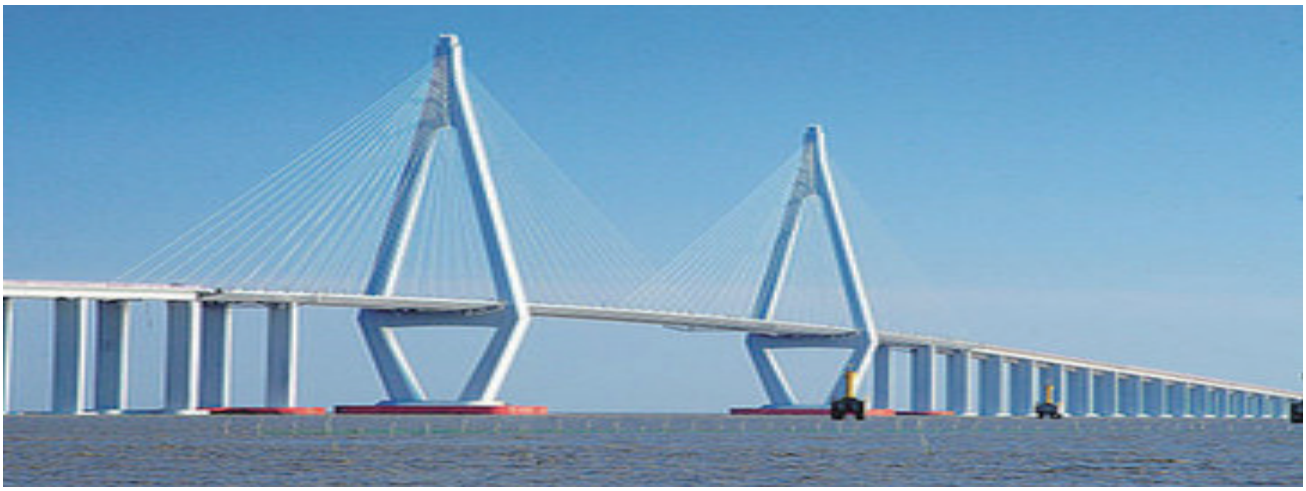
昼食に、両校の生徒は一緒に具沢山の味噌汁、おにぎり、夏野菜の即席漬け、だし巻き卵を作り、日本の食文化を楽しみました。中国の生徒はおにぎりに興味しんしんでした。

交流会・出し物披露

互いに学校の出し物を発表し、麗水学院の生徒は笛を吹いたり、歌を歌ったりしました。三島南高の生徒は神経衰弱用の絵の描いたカードを自作したもので、小班に分かれてみんなでプレイしました。カードには、『富士山』『海』などの絵と、それぞれの単語を中国語と日本語で書いてあり、お互いに読みあい、中国語で、日本語でなんというかを教えあって楽しみました。

人をつなぐ、物をつなぐ橋梁物語

2008年竣工の『杭州湾海上大橋』



浙江省東部の杭州湾を南北（北は嘉興市海塩県、南は寧波市慈渓県級市）に縦断する海上橋・杭州湾海上大橋（中国語：杭州湾跨海大橋）が2008年５月１日に開通しました。

開通当時、海上橋としては世界一、陸上橋を含めても世界第２位となる全長36kmです。現在は、世界最長の橋は青島膠州湾大橋（全長41.58キロ）であり、杭州湾海上大橋は世界第３位、海上橋としては世界第２位です。海上橋の開通によって、従来、陸路の移動距離が400kmだった寧波市と上海市は120kmに短縮され、移動の所要時間はわずか２時間となりました。

海上橋ではあるが、大部分は常時陸地もしくは潮位によっては干潟となる部分であり、水上を通る部分も銭塘江の淡水と混じり合う汽水域である。本来、海流が複雑で、流れが速い杭州湾に海上橋を建設することは困難と見られていたが、設計・資金・施工のすべてを中国国内で賄った杭州湾海上大橋の建設に総工費118億元（約1650億円）をかけ、2004年の着工からわずか３年で架設工事を終了しました。

2010年12月18日には、３年にわたって建設された「杭州湾跨海大橋」の海上展望台「海天一洲」が落成しました。「海天一洲」は杭州湾跨海大橋南岸1.7キロに位置し、観光台と観光タワーからなり、海面上の面積１万２千平方メートル、そのうち、観光タワーは16階建ての高さ146.5メートル、観光展望台は観光やレストラン、ショッピング、宿泊を一体化した施設です。

浙江人物点描

宗 慶後

～杭州娃哈哈集団（ワハハ）創業者～

【 宗慶後氏 】

中国最大の飲料メーカー

宗慶後氏（浙江省杭州市出身）は、1987年設立の杭州娃哈哈集団（当初、杭州娃哈哈栄養食品工場）の創業者であり、現在も董事長兼総経理を務めています。同社は、現在、全国各地に80の生産拠点で、乳飲料、飲料水、炭酸飲料、フルーツ飲料、お茶、健康飲料、ビール、缶詰食品、スナックなどを製造し、総資産400億元、従業員３万人を有する、中国において最大規模の飲料企業となっています。

"ゼロ" から、年平均６０％成長

1945年に生まれた宗慶後氏は、42歳の時に、仲間３人で、14万元を借金して、ずっと赤字状態にあった学校直営工場を引き受け、サイダーとアイスキャンディの製造・販売を始めました。

起業する前の経歴：1963～1964 浙江舟山馬目農場（現、東海農場）農業従事、1964～1978 浙江紹興茶工場生産技術、1978～1979 杭州工農校・紙箱工場業務員、1979～1980 杭州光明電器儀表工場生産販売、1981～1982 杭州勝利電器儀表工場生産管理、1982～1986 杭州工農校営工場業務員、1986～1987年、杭州市上城区校営企業経営販売部部長

小魚、大魚を食う

1989年、子供用栄養ドリンクの販売代理店となり、後に瓶詰め機械を導入して、その栄養ドリンクのボトラーへと会社の業態を変え、これが大ヒット商品となり、校営企業をベースに「杭州娃哈哈栄養食品廠」を設立しました。

1991年、小企業「杭州娃哈哈栄養食品廠」は、大企業・債務超過に陥っていた2000人の職員を有する国営企業「杭州缶頭食品廠」を買収し、生産額２億元を超える杭州娃哈哈集団になりました。

仏ダノン社と合弁、後に解消

抜群のコスト競争力で順調に事業を拡大してきた娃哈哈にもこれまで何度か危機的な局面がありました。その最たるものは2007年に表面化した仏ダノン社との経営権争いであり、1996年から同社の合弁相手となり、後に敵対的買収を仕掛けたダノン社と、宗氏及び同社の従業員、代理店とが激しく対立した末、2009年９月に同社が合弁会社におけるダノン社持分を買い取ることで最終決着しました。

生活革命!!

現金をもたない生活が当たり前に！

寧波大学外国語学院外籍教師
（静岡県日中友好協議会　交流推進員）
横　井　香　織

日本は海外と比較すると、現金比率の高い国です。日本にいたころは、バッグの中には必ず財布があり、現金とともにクレジットカードやキャッシュカード、ショップの会員カードを持ち歩くのが日常でした。ところが中国にやってきて4年目を迎えた今では、現金を持たない生活があたりまえになってしまいました。

中国では、スーパーやショッピングモール、レストランはもちろん、小さなフルーツショップや屋台に至るまで、支払いはモバイル決済です。現金決済もできますが、モバイル決済に慣れてしまうと現金を扱うのは面倒です。今では、バッグの中に財布はありません。多くの人が利用するモバイル決済は、微信（WeChat Pay）と支付宝（Alipay）の２種類です。いずれもショップのＱＲコードをスキャンするか、自分のＱＲコードをスキャンしてもらうか、どちらかの方法で支払いを済ませます。すると登録先の銀行から、支払った金額と口座の残高を知らせるメッセージが届きます。支付宝を利用すると、月末には１か月の収入・支出の総額だけでなく、用途別の集計グラフまで表示されます。お金の管理までしてくれる、というわけです。

これほどまでモバイル決済が普及したのには、中国の高額紙幣が100元（約1500円）であることや偽札対策があるかもしれません。キャッシュレスの利点として、①モバイル決済なら手数料がかからない、②１円未満の細かい決済もできる（割り勘のとき便利）、③24時間365日、リアルタイムで決済できる、④ショップの公式アカウントをフォローすると会員になれる（会員カードを別に持つ必要がない）、⑤光熱費などの支払いができる、などがあります。家賃もモバイル決済を利用して、支払いをしています。また、地下鉄やバス、タクシーの支払いも、モバイル決済でできるので、日常生活で現金を持ち歩く必要はなくなりました。銀行へ行く機会もぐっと少なくなりました。

ただ、いくつか心配な面があります。１つは、セキュリティの問題です。二重認証になっているのですが、スマホをどこかに置き忘れたり落としたりしたらと思うと、それだけでは心配なので保険に入っています。もう１つは、大規模停電やシステム障害の問題です。これまで、幸いにもそのような不測の事態にはなっていません。それでも、万が一のときを想定すると、現金を全く持たないのも不安な気がします。結局、数日生活するのに困らないくらいの現金は、手元にある方が安心なのかもしれません。

【フルーツショップ】

【スーパーのレジ、スマホ決済】

～治水への献身物語～『 大禹治水 』

治水神・「禹王」　「禹」（紀元前1900年頃）は中国古代の最初の王朝『夏』を創建した王であり、特に治水事業を成功させた人物として知られています。「大禹治水」の物語は、古代より今日まで代々伝えられており、最後は紹興で亡くなり、会稽山に葬られたとされています。「禹王」を奉る伝統が各地で継承され、全国各地の暴れ河川の岸辺には「禹」の顕彰碑が建立されています。

『大禹治水』

4,000年前、黄河流域は大洪水に見舞われ、多くの畑が被害に遭い、多くの人々が命を失っていました。禹はその洪水を収めた功績で、人々から敬愛されています。

禹は治水事業のため、結婚してわずか４日目に家を出たと言われています。また、その後全国をまわっている時に、自宅近くを３回通り、自分の生まれたばかりの子どもの泣き声を耳にした時なども、業務が遅延することを恐れ、家に立ち寄らなかったという逸話が残されています。この話は、美談として今日まで人々に伝えられ、公のために自己を犠牲にする精神を「三回も家を通っても入らない」という喩に用いられています。

禹はこの仕事を13年間、休むことなく続けました。「禹は偏枯なり」という言葉の通り、治水作業で泥水に長く浸かっていたため、脛の毛がみな抜けてしまい、日照りの中を歩き続けたので皮膚は黒く焼け、長年に渡り土手を掘り続けたため、手は硬化してしまったと伝えられています。そうして13年間にわたる努力が実り、黄河の洪水は見事に治水されました。

発行所：静岡県日中友好協議会　静岡市葵区追手町44－1（静岡県産業経済会館１F）
発行人：栗　原　　績　TEL（054）255－8111